基調講演

4月23日(土)
10:00～12:00

【会場】
富山大学共通教育棟
C棟C21番教室

基調講演

こどもと地域力

【基調講演主旨】

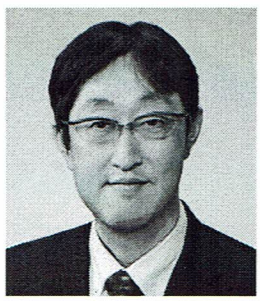
今年のこども環境学会大会のテーマは「こどもと地域力」です。こどもは地域に育てられますし、地域を育てます。こどもの成長を支えるのが「地域力」ですが、地域力はこどもの健やかな成長を単に見守るものだけでなく、こどもたちが地域に働きかけ、地域がこどもによって変化させられていくことを許容するような懐の深さも必要です。

多様な側面を持つ「こどもと地域力」を考えるために、２名の研究者からお話をうかがいます。

一人目は、神川康子氏です。生活習慣の内、「睡眠」の重要性についてお話しいただきます。人々が24時間いつでも多様な活動ができるように社会は変化してきました。その結果、こどもの生活時間も次第に大人に引きずられ深夜化することが指摘されています。このことは生活習慣の問題として指摘されることが多いです。しかし、それ以上に問題なのは睡眠不足それ自体がこどもの健やかな成長を妨げることです。睡眠環境はこどもの成長にとって重要で、それを支えるものの一つが「地域力」であることがわかります。

二人目は、高橋勝氏です。グローバル化が進む中、人々の生活の場が均質化し、コミュニティ弱体化した結果、すべての生活を自分の力で対処する必要が生じました。その結果、地域の中にある多様な人間関係を学び成長してきたこども・若者が、今までのような形で成長するのが難しくなりました。つまり、「地域力」の弱体化です。そのような中でも、自分たちで創造的な作業をして成長を促す、冒険遊び場やフリースクールなども地域の中で生まれつつあります。このようなものの中にある豊かさを学び、改めて「地域力」のあり方を検討することの必要性をお話しいただきます。

これら二つの講演を通じて、参加するみなさまとともに「地域力」とは何かを考えていきたいと思います。



大西 宏治
Koji ONISHI

富山大学人文学部准教授。
1969年 旭川市生まれ・釧路市・岩見沢市・札幌市育ち。
2000年に名古屋大学大学院文学研究科博士課程満期退学。名古屋大学文学研究科助手、同環境学研究科助手、富山大学人文学部助教授を経て2007年より現職。
専門は人文地理学・子どもの地理学。時間地理学を用いた子どもの生活時空間の時代変化の研究を行うとともに、富山まちなか研究室（MAG.net）を拠点に学生とともにまちづくりに取り組む。

◆基調講演

神川康子（富山大学 理事・副学長）
　こどもを育てる地域力
　―家庭・学校・地域で育てる睡眠・生活習慣はこどもたちへの一生もののプレゼント―

高橋 勝（帝京大学大学院 教職研究科長）
　子ども・若者が関わり合う場所を創る
　―グローバル化の波を超えて―

こどもを育てる地域力
～家庭・学校・地域で育てる睡眠・生活習慣は こどもたちへの一生もののプレゼント～

神川康子
Yasuko KAMIKAWA

富山大学理事・副学長（教育担当）。専門は家庭経営学、家族関係学、住居学、睡眠学。1975年 奈良女子大学卒業。1977年 同大学院家政学研究科住環境学専攻修了。1980年 富山大学教育学部講師、1989年 同大学助教授、1998年 同大学教授、2005年 同大人間発達科学部教授を経て、現在に至る。また、2006～2010年３月まで附属小学校長兼務、2010年４月～2013年３月まで人間発達科学部副学部長、2013年３月31日～2015年３月まで人間発達科学部長を歴任。

１．はじめに

日本のこどもたちは先進国の中でもっとも夜更かしで睡眠時間が少なく、睡眠の質も低下していることが研究報告されています。このような生活リズムを左右する「睡眠・覚醒リズム」の乱れは、こどもたちの脳（前頭前野）の働きを低下させ、論理的思考力や学習意欲の低下から学力低下を招き、さらには体力や精神力の低下も招くことが懸念されます。こどもたちの心身の健康を改善し、本来の健やかな成長を保障し、真の「生きる力」を身に付けさせることは、大人から生涯役立つプレゼントをすることになります。そのためには、こどもたち自身はもちろんのこと、保護者や教師、地域の大人たちが生活習慣確立の重要性を科学的に共通理解し、家庭・学校・地域が連携・協力して互いの生活スタイルを見直し、改善点を見い出し実行していくことが重要であると考えます。

２．こどもを取り巻く環境の課題

私の研究室では30年以上に渡って、乳幼児から大学生までを対象に生活実態を調査・分析し、就寝時刻の遅れや睡眠時間の短縮がこどもたちの成長に及ぼす影響を調べてきました。

夜更かしや睡眠不足はこどもたちの日中の疲労感を増大させ、集中力や活動レベルなどのQOLを低下させ、日中の体温上昇を阻害して寝つきを悪くし、またさらに夜更かしになるという「悪循環」を招くと報告してきました。一方でこどもたちの生活習慣の確立は生まれ育つ環境、つまり関わる大人の影響を受けていることも明らかで、24時間化した社会において、どのようにこどもたちの睡眠習慣を確立するのか、家庭や学校、地域の関わり方にも課題が見えます。

誰にも24時間しかない毎日の生活時間にどのように優先順位をつけ、自己管理できるように育てるかが重要な課題となります。最近の家庭ではこどもに早寝を促すことが少なくなり、こどもたちの生活が大人と同じでも問題がないと考え、こどもの健康や発達に科学的理解を示さない大人たちも増えています。かつては家庭生活の中で生活・睡眠習慣が身に付くように指導されてきた経緯もありましたが、現代では健康に生きていく源でもある「食べる、活動する、眠る」という基本的な行動の重要性を科学的な根拠をもって伝え・教える場面がなくなってきていることが深刻な事態を招いていると言えます。

３．睡眠習慣の重要性を科学的に伝える

平成26年度には文科省も「中高生を中心とした子供の生活習慣が心身へ与える影響等に関する検討委員会」で調査を実施し、平成27年度には中高生用の啓発資料と指導者用資料が作成されました。私自身は、これまでの研究から、このような指導・理解は児童・生徒のみならず、親になる準備段階から理解しておく必要があると考えています。適切な生活・睡眠指導が小１プロブレム、中１ギャップなどの課題解決に繋がり、その後の健康や行動にも影響するので、家庭・学校・地域が連携し、時間をかけて確立していきたいものです。

４．未来を担うこどもたちへ

未来を担うこどもたちが基本的生活習慣を身に付け、心も体も健やかに成長していくことが、やがては地域の活性化に繋がり、社会秩序が保たれ、深刻な事件や事故も未然に防いで経済損失を最小限に抑え、継続の力や体力・耐力のある安定した社会や国家の実現につながると言えます。生活を見直し改善できるこどもたちが、「真に賢く、優しく、美しく、人間力を身に付けてくれる」ことを日頃から学校や地域に伝え、保護者の方々には子育てに自信と安心感を持っていただけるようにと願っています。

子ども・若者が関わり合う場所を創る
—グローバル化の波を超えて

高橋 勝
Masaru TAKAHASHI

帝京大学大学院教授。専門は、教育哲学、教育人間学。現象学の方法を駆使して、子ども・若者の自己形成空間を研究する。
1977年 東京教育大学大学院教育学研究科博士課程満期退学。愛知教育大学助教授、横浜国立大学教授を経て、2012年 同大学名誉教授、帝京大学大学院教職研究科長。教育哲学会常任理事、臨床教育人間学会会長、神奈川県教育委員。
著書に、『子どもの自己形成空間』(川島書店)、『文化変容のなかの子ども』(東信堂)、『情報・消費社会と子ども』(明治図書)、『経験のメタモルフォーゼ』(勁草書房)、『子どもが生きられる空間』(東信堂)、『流動する生の自己生成』(東信堂)などがある。編著に、『子ども・若者の自己形成空間』(東信堂)などかある。

1．グローバル化の波と子ども・若者の孤立化

1990年代にはじまるグローバリズムの荒波は、日本の大人社会だけでなく、子ども・若者が生きる世界にも深刻な影響を与えてきた。グローバル化という言葉は多義的に使用されるが、情報化と市場化、それに伴う消費生活化の流れを指すことが多い。地球規模における情報化、市場化、消費生活化が、社会移動と流動化を促進し、地域という大地に根を張った「生活の場所」(トポス)を、均質な消費空間に塗り変えてきた。大人たちが子どもと共に暮らし、助け合い、苦楽を共にしてきた地域は、生活共同体(コミュニティ)としての存立基盤を失い、今や崩壊寸前の状態にある。

2．子ども・若者が関わり合う場所—地域社会

社会のグローバル化は、人々を地域共同体から離脱させ、自己選択と自立(Independence)を促す機能的な社会システムを広げてきた。選択と自立と言えば、聞こえはよいが、子育てから福祉、医療まで、共同体の援助なしに、すべて自前で処理する社会システムである。そこでは、人々が共に日常生活を送る基盤としていた生活世界(Lebenswelt)が分断される。地域の大人たちに混じって、子どもや若者たちが顔を突き合わせて暮らす(遊ぶ、学ぶ、働く)ことができない社会システムが出現した。子ども・若者・高齢者がバラバラにされて、それぞれの必要(ニーズ)に応じて、一対一対応で「教育」や「介護」などの「サービス」を受ける無力な消費者に変わる。

しかし、子ども・若者が育つには、地域社会におけるタテ・ヨコ・ナナメの豊かな対人関係と多世代関係が不可欠である。子どもはその生命を、家族や身近な他者、郷土の自然によって育まれる。子どもを丸ごと包み込み、豊かな関係網によって、その生命を育む場所が地域なのである。あえて言えば、子育ての主体は、親ではなく地域である。人類の長い歴史において、子育ての主体が親と目されるようになったのは、日本では、都市型の核家族が出現する大正期以降であると考えられる。親でも学校でもなく、地域こそが、子育てと若者の社会化の担い手であったことを肝に銘じておきたい。

3．「場所」が子ども・若者に生命を吹き込む

しかしながら、都市型のライフスタイルと操作的な教育空間が広がるにつれて、生命体としての子ども・若者が「生きられる空間」は縮小してきた。不登校の子どもの増加や学校におけるいじめが一向に減らないのは、子ども・若者が単体化されて、一対一対応の「操作空間」の中に吸収されてしまった結果ともいえる。子ども・若者が「生きられる空間」とは、フリースクール、冒険遊び場、放課後キッズクラブ、引きこもり支援カフェなど、大人が介入しない活動の場所である。自分たちで何かを創り上げていく場所である。遊び、造形活動、表現、音楽活動、社会貢献活動など、何でもよいが、子ども・若者が自分たちの手で、試行錯誤しながら何かを生み出せる場所が必要である。

4．「孤立した自立」よりも「関係の豊かさ」を

グローバル化社会は、子ども・若者を、自分では何もできない消費者に仕立て上げて、キャリア教育や自立支援など、さまざまなサービスを提供する。しかし、こうした「個別のニーズとサービス」思考が、子ども・若者・大人の関係性に満ちた暮らしを崩壊に導く要因でもあることに早く気付く必要がある。それは、「未開」、「発展途上国」などと称されてきた市場経済の外部にある人々の暮らしの豊かさに気付くことにもつながる。